

俳優の素顔に関するパラドクス ——石井洋二郎先生を送る——

増 田 一 夫

長年にわたり研究、教育、行政の面で非凡な活躍をなさった石井洋二郎先生が駒場を去られる。ご定年は予期されたこととはいえ、その大きな存在が遠ざかることに、未知への跳躍に臨むような心細さに捕らわれている。

専攻紀要というやや親密な場を与えられ、専攻ばかりでなく部会も同じくした者としては、自分の想いに映る石井先生の素顔を語るのが使命であろう。だが、言葉が思いの丈に遠く及ばぬため、それは容易な作業ではない。そのうえ、『教養学部報』に載せられた先生の文章「駒場をあとに：さよならコンサート」に読まれる告白がさらにハードルを高くしている。すなわち、石井先生をめぐる「官僚的で冷徹なイメージ」はけっして素顔ではない。「もちろん、すべては若き日の演劇活動で身につけた演技力の賜物」であったというのである¹⁾。すべては演技の賜物？「学内行政の場でしか接する機会がなかった先生方の目には」という限定がなかったならば、素顔を語るという試みそのものが端的に無効化されてしまっていたはずである。

自分は演技をする者だと警告する人物の素顔……。石井先生は学内行政以外の場でも演技され、笑いを誘っていらした。フランス語の *pince sans rire* を思わせる笑い。英語の *deadpan* に近いらしい。自身は感染することなく相手を笑わせるという、やや乾いた、洗練された笑いである。その演技性は18世紀の啓蒙思想家ドゥニ・ディドロの「俳優に関するパラドクス」を思わせる。曰く、優れた役者というのは、自分が演じる人物の感情を感じる者ではない。それを感じないほど、観客にその感情を感じさせることができる。演技とは憑依ではなく、解釈であり構築であるという見解。これは奇しくも、ハンナ・アーレントが語る演劇としての政治にも通じる。政治とは、生身の人間が信条や情念をぶつけ合うものではなく、素顔を隠すペルソナ(仮面)を付けた役者による発言や行為だという。石井先生が学内行政において大きな足跡を残されたのは、この演技性を身につけられていたからだろうか。

石井先生は、20世紀から21世紀への転換期に地域文化研究専攻の主任を務められた。その数年前の重点化によって専攻責任者の業務が激増したにもかかわらず、役職名はまだ「主任」のままであった。待遇も、「学科長」より低いというパラドクスが解消されずにいた。石井先生の行政的キャリアにはその後も何かしら普通ではないものが付きまとい

ている。専攻主任を辞して10年以上も経ってから副研究科長に選出されている。ご本人の言葉を借りるなら、「冷蔵庫の片隅で賞味期限を待っていた赤福が突然チンされた」ような出来事であった。その2年後には、研究科長になる前に副学長に就任。さらに2年後、総合文化研究科長・教養学部長に選出されて異例の降格人事。任期終了後はふたたび本郷へ。今度は理事、そして再度の副学長。他にあまり例のない経歴である。しかも、この半世紀の学部長としては最長不倒を誇る25.5ヵ月の任期を全うし、卒業の式辞を3回述べるという偉業を達成されている。

その最後のものが、あの「大河内一男総長が語ったとされている、ジョン・スチュアート・ミルが語ったとされている『太った豚になるよりは痩せたソクラテスになりなさい』」をめぐる伝言ゲームの真相暴露である。紙幅を気にしながら「石井学部長が語ったとされている『大河内一男総長が語ったとされている……』」と説明しようものなら、「一種の伝説」となった「幻のエピソード」をめぐるのと同じ過ちを犯しかねない。3回目の式辞について知りたい向きは、文末注のURLを訪ねていただきたい²⁾。2016年末まではそこで全文を読むことができた。「必ず自分の目で確かめること」は式辞の重要な論点のひとつでもあるので、ぜひお願いしたい。

「官僚的で冷徹なイメージ」は、石井先生がまるで改革請負人のようなタイミングで研究科・学部の長になられたことと無関係ではない。部局長としての姿は、ブランク時代の言動からは予想しがたかった。当時は、「確実に成功する見込みのない改革などやる価値がない」と何度となく発言されていたからである。心変り？ そうではないだろう。真の気持ちは、「さよならコンサート」に書かれているように、秋期入学問題による混乱への怒りであり、安易な「ギャップターム」や「国際化推進」という「学内外の無理解な声に対しても、言葉にできないほどのいらだちを覚えた」というものだったはずである。

このように考えてみると、軽妙な物言いを得意とする俳優に、悲劇の影がつきまとい始める。好んで行政に携わったわけでもなく、好んで改革の渦中に身を投じたわけでもなかった。まぎれもなく、「みずからの過去に追いつかれた」という図式に当てはまる。高校時代から演劇に魅せられた青年がいて、少し後輩に野田秀樹という存在がいなければ好きな道が続けたはずであった。主役ではなく、その人がいると芝居が引き立つ、名脇役と言われるような役者になりたかった青年。私の記憶違いかもしれないが、「近藤正臣のような」と彼が漏らしたのを聞いたように思う。

芝居を諦めた青年は、東京大学文科一類に入学、法学部を卒業する。しかし、その学部の重要な使命である官吏の育成というルートから逃れるようにフランス文学大学院の門を叩き、研究者となり、冴えわたるペンでもってロートレアモンからブルデュー、フーリエから日本文学と縦横無尽に論じる。その活動から生み出されたのが、無慈悲なまでに厳格な『フランス語文法要説』から緩そうなタイトルの下に鋭い棘を隠す『毒書案内』

(ママ) にいたる、多様なテーマを多様なアプローチで語る作品群であった。ところが、越境と創造への道において、ロートレアモンをめぐる記念碑的な著作を著した少し後に法学部という過去が彼に追いつき、縁を切ったはずの行政へと容赦なく彼を引き戻すのである。かくして、在職期間の最後の7年は学内行政に捧げられた。もっとも、激務のなかで、藤垣裕子先生との共著、『大人になるためのリベラルアーツ』というスリリングな教養書も刊行しているが。

望んだ役ではなくても、役以上の、役を超越する演技を披露してしまう非凡な俳優。最も憑依型の俳優よりも真に迫った演技を展開できる俳優。演技することが自然体となった人物に「あれは演技であった」と打ち明けられても困惑するばかりである。逆に、「これは素顔である」と言われた場合も事態はいささかも変わらない。「さよならコンサート」には、「素顔のままで『新しい生』を生きてみたい」という、心の叫びのような文言がある。だが、それは一種の罨である。なぜか？「さよならコンサート」には16曲のタイトルなどが密かに引用されているのだが、「素顔のままで」もそのひとつだからだ。400曲余りのレパートリーを持ち、専攻室に自らのレコード・ジャケットが飾ってあった人物らしい凝った仕掛け³⁾。「素顔のままで」が私の思っているようにビリー・ジョエルのタイトルだとすると、それは石井先生自身の発言ではなくなる。おまけにその原題は *Just the Way You Are* であるため、「素顔」が誰のものであるかはさっぱり分からない。「今後は素顔のままで生きたい」と発言する人物は、自身のペルソナの裏を明かそうとはしていない。それともランボーのように、「私は一個の他者である」という深遠な思想を語っているのだろうか。

石井先生は駒場を去られる。数々の名演技には、心からの感謝を込めて拍手を送りたい。駒場を離れられても先生の演技が終わることはなく、ペンやマイクも置かれることはないに違いない。さらに、申すまでもないことだが、遠からぬ日に、大きめのディスプレイを備えてやや照明を落とした部屋で、「アンコール・コンサート」が開かれるのを切望している者が何人もいることをお伝えし、送る言葉としたい。

注

- 1) 「駒場をあとに：さよならコンサート」、『教養学部報』第588号、2016年12月6日。
- 2) 2016年末の時点では、以下のURLにてその式辞を読むことができる。
<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/about/history/dean/2013-2015/h27.3.25ishii.html>
- 3) 8号館4階にあった専攻室には、石井先生の写真があらわされたレコード・ジャケットが掲げられていた。かつてのLP版のサイズで、歌手・石井洋二郎が歌う曲のタイトルが印刷されていた。A面「セーヌ川」、B面「仏蘭西の女」(勸亭流のタイトルの脇には、それぞれ「さだめがわ」、「ふらんすのひと」という読みが示されていた)。専攻室の石井ファンが作成したもので、いまでもどこかに保管されているはずである。残念ながら、上記の曲がリリースされたという事実はなさそうであるが。